

浄土

1995・9



日想観について◇高口恭行
小泉八雲と日本仏教◇北山宏明
新宗教と現代社会(講演概録)◇武田道生

【連載】

楽屋ゆかた	関 容子
外国で生活して	後根定璽
念仏信仰の系譜	須藤隆仙
共に生きる	御所野洋幸

誌上特設ぎやらい
遊行期 大島泰生の仏画



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

遊行期

大島泰生(泰雄)の仏画









釋迦牟尼佛

大島泰雄氏は明治41年1月1日生まれ。
大島泰信・もとの長男として、東京深川
の西光寺で誕生された。

本郷西片の誠之小学校、私立京北中学校
そして浦和高等学校、東京帝国大学と進み
卒業の後、大学院での研究生活を選ばれ、
昭和25年には東京大学教授とられた。

昭和37年、東京大学評議員、40年には東
京大学農学部部長。43年に東大を定年退官
となられてからも、第一人者として水産学
会の要職を歴任。

多くの教え子、後輩、後継者を育て、栽
培漁業等の研究者としてその功労を広く深
く讃えられる、文字通りまことに激務をこ
なされた人生であった。

けれども氏は七〇歳を過ぎて尚、意気軒
昂。まったくの独学で仏画を始められ、泰
生の雅号をもつて多くの、きわめて完成度
の高い作品を遺された。

平成6年1月23日、享年86歳で御逝去な
さるまで、茅ヶ崎の御自宅にて画筆を揮った
15年間は、まさに氏の「遊行期」ともいう
べき、尊い、美しい時期であった。

高齢化社会といわれる現代、氏の遺され
た素晴らしい仏画は、さまざまな分野、さ
まざまな境遇、さまざまな人々に対して、
等しく大きな希望と勇気をもたらすもので
はないだろうか。

本誌、編集部はまさにそうした願いをこ
めて、奥様の淑さまを茅ヶ崎にお訪ねし、
戦前戦後の興味深いエピソードを拝聴する
なか、趣旨に御賛同頂き、掲載の御快諾を
得たものである。

最後になるが大島泰雄氏は、作家武田泰
淳氏の実兄にあたられ、墓所は本籍でもある
東京、中目黒の長泉院。浄土の法号を顕
真院究譽理字泰雄居士と号される。

(合掌、十念)

浄土

じょうど



1995/9月号 目次

カラーグラビア遊行期	仏画=大島泰生	3
日想観について	高口恭行	8
小泉八雲と日本仏教	北山宏明	16
念仏信仰の系譜最終回	須藤隆仙	22
コラム		29
楽屋ゆかた中村助五郎	関 容子	30
表紙は語る共に生きる	御所野洋幸	35
外国で生活して	後根定璽	40
講演概録 新宗教と現代（前編）	武田道生	46
コラム		54
Jフォーラム		55
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

連載

お彼岸に思う

日想観

西方

一心寺住職

高口恭行

日想観と一心寺

一心寺は法然上人「日想観」の霊跡として知られております。文治元年（一一八五年）春、当時四天王寺の別当であった慈鎮和尚の請により上人がこの地を訪れ四週四面の草庵において止住せられ、たまたまこの地を訪れた後白河法皇と共に日想観を修せられた……というのが一心寺発祥の由来になっているのであります。「あみだ佛といふより外は津の国のなにはのこともありかりぬべし」と上人の御歌にたいして、法皇も「浪華蕩入りにし日をもながむればよしあしともに南無阿弥陀佛」と唱和されたとあり、二首のお歌とお名号の掛軸が一心寺に伝わっているのであります。

「日想観」とはご承知のように、観無量寿経の中で釋尊が絶望の淵にのぞむマガダの王妃ヴァイデーヒ（韋提希）に説いた極樂浄土の観法。今日ふうにいえば極樂ウォッチングのノウハウということになるのであります。段階をおって一六の方法が示されるうちの最初の方法。それが日想観でありました。「韋提希よ、それでは話しましょう。阿難よ、おまえもよくお聞きなさい。苦しみの世界に生きる生きとし生けるものたちのために説きましよう。阿弥陀佛の極樂浄土を見るためには、まず心からあらゆる雑念を除いて西方をじっと思うのです。すなわち、西に向かって正座し、落日の光景を見るのです。日が西の

地平に沈んだ後、目を閉じてでも開けてもその日輪の形が鮮やかに見えて忘れられないときは、それで観想が成し遂げられた証拠なのです。これを日想といい、初観と名づけます。」

当時、大阪の上町台地のこの一帯は、熊野参詣の道筋にあたり、朝京都を出発して伏見から舟で淀川を下ると夕方に台地北端に着き徒歩で四天王寺付近に至る頃ちょうど日没に出あうことになったようで、夕陽丘の名が古くから残っているであります。難波の津を眼前にのぞむ台地上の小さな庵の中に端座されるお二人。いつしか日は対岸の六甲の山の端にかゝり、最後の輝きを残して消える頃夜の闇がお二人のまわりに迫っておりました。

南無阿弥陀佛・南無阿弥陀佛・南無阿弥陀佛……。実はこの時、その落日の西の海では源平合戦の最後の決戦が壇の浦で始まろうとしていたのであります。その前年、一ノ谷の合戦での鶴越えや熊谷直実と平敦盛のエピソードはすでにお二人に届いていたことであります。この年二月の屋島の合戦の戦況もつたわっていたと思われまふ。戦馬のとどろき。

弓矢のうなり。首が飛び、手足が切斷され、血しぶきが飛ぶ戦乱。そのことがお二人の目にはつきりと映っていたのではないのでしょうか。この戦乱の向こうに、今まっ赤な太陽が重なっている。その巨大な光明な中にこそ浄土があるという。どれほど切なる思いで落日を拝されたことか。今日、このエピソードを思う時、そこにこめられた「厭離穢土。欣求浄土」の烈々たる思いを感じないわけにはゆかぬのであります。

今日の一心寺は当時とかわらず、その上町台地の上にあります。しかし、「よしあしとにも南無阿弥陀佛」と詠まれた葦の茂る「浪華湯」の一帯は天王寺動物園の緑と高速道路の高架橋、通天閣、その向こうに続く高層建築群で埋ってしまいました。

二十余年余り前、私が一心寺に着任しました時分にはビルの間に大阪港の船のマストが見え、西風が吹く静かな夜には漁船の焼玉エンジンの音が聞こえたこともあり、明治・大正年間に大阪の町は急速に西へ拡大いたしました。がそれでも昭和四〇年代当時「西方」は海であり、日想観の故事を想うことが可能であつたのです。その後の二十年は状況を一変させたように思います。建築物が全て高層化し、ひところ海を感じさせてくれた南港大橋の鉄骨も今日では隙間からもみえなくなつております。

西方へ向かう

終戦の年、五才の私は上海から引き揚げてまいりました。佐世保に向かう船中でなくなくつた方があつて、白い布でぐるぐる巻きになつた遺体が板の上に置かれ、読経のあとスベリ台をすべるようにして海面に落下してゆきました。はつきりと覚えています。佐世保に上陸すると、子供心に想像していた所とちがつて、ずいぶんひと気のない浜辺に上陸させられました。ハゲ山の谷にそつて粗末な小屋が並んでいて、そこで突然白い粉（DDT）

をかけられたのを覚えています。仮の宿泊所は更に谷をまわりこんだ山の中のような処だったという記憶がありました。先年、五十年ぶりに佐世保の引き揚げ記念館を見学し、当時の施設模型を見てこれらの記憶が実に正確であることが判り、われながら驚いた次第ですが、これらの思い出はまさに大阪の今の私から見て西に堆積しているのです。

ボンベイから夜行バスに乗ってアウランガバードへ向かった時のことも妙に鮮明に覚えていきます。午前三時にまっくらな峠の村に一軒だけお茶を売る店のアセチレンガスの灯が道を照らしていて、外国人は私だけで甘い紅茶を寂しくすすりながら見上げた夜空は満天の星でありました。六年前のこの記憶も今は西の彼方に小さく消え入ってゆきました。そういえば十五年程前にバーミヤンの石窟を訪れた時は、日の出を見る丘の上で井上靖さんに会ったことがあります。西方外国の話ばかりではありません。引き揚げてしばらくしてなくなった母親の記憶もなぜか今から見ると西に堆積しているように思われます。私達の「今」は太陽と共にあり、それゆえ過ぎゆく「時」は落日と共に西に移動して西方に堆積してゆく。上海のことも佐世保のこともインドのこともアフガニスタンのことも……そして母のことも結局映画のフィルムを引き延ばしたように西に巻きとられて延びているのではないか…。

日想観ゆかりの寺、一心寺の住職になって以来、私は多少なりとも「西方」を意識しな

がら暮らしてまいりました。二十数年がたち、前述のように一心寺からみえる西方はすっかり変わってしまったように思われます。その間に普請した建物は日想観にちなんで日想殿と銘名し、出来うるかぎり、落日と西方が見える形を考えてみました。今なお「日想観」とか、わることのできる建物は何かといったことを考え続けているような気がいたします。しかしながら私の思い出と過去がすでに西方に巻きとられつつあるように、具体的な西の風景など全く問題ではなく、まさしく心から雑念を除き大空においた太鼓のような夕日を心の中に存在させることこそが、この時間と空間に身を置くための真実なのではないか。そのように思われます。私達の存在は、たしかに「今」にあるのでありますが、実はホウキ星のように過去をひきずっている。その光の尾は太陽の時間に従って西に向かつてのび、巻きとられているのではないのか。西の空に輝く夕日を見ると私はずいぶんかのように確信いたします。この無限の時と、無限の光明をつかさどっている本体である太陽に心から敬愛の念を禁じえない。いずれその「西」へ向かつて私の「今」は巻きとられてゆくであろう。そのように思うのであります。日想観に続く一五の観方とは極楽浄土の様子を詳しく説明する水想観、宝地観、宝樹観、宝池観、宝楼観、華座観、像想観、佛身観、観音観、勢至観、普観、雜想観、そして極楽へ往生する九種の様子が上輩観、中輩観、下輩観と続きます。特にこの中で佛身観は阿弥陀佛のお姿を説くのでありますから独立し

たお経としてこの部分だけが誦まれることも多いのですが、これも皆様よくご承知のことだと思えます。この佛身觀を拝読いたしますと「阿弥陀佛の体は尊い金色である」とあります。その背丈はとうてい測ることのできないほどの高さであつて、眉間の白毫だけで五つの大山をあわせただほどの大きさがあると書かれております。そして「また、体の毛穴という毛穴からは光明が放出され、頭の頂の後ろから放たれる円輪の後光は大きく鮮やかに輝き、すべての世界を包みこんでしまひそう」だともあります。このすばらしく大きな光明のエネルギーを心にしっかりと捉えんとするならば、それはまさにこれらの最初に説かれる「日想觀」こそがその方法であり、落日の太陽こそ最も阿弥陀佛に近いイメージなのであります。私達は阿弥陀佛の救いを信じ、帰依するなかに眞実の自己が現われるのだと教えられて来ております。そして更に加えるならば、そのすばらしい大きさと輝きを落日の太陽を通して感得したいものであります。

お彼岸は彼の悟りの岸に至る旅立ちの日。西の落日へ向かつて一二歩足をふみ出してみてはいかがでしようか。

※觀無量壽經口語訳部分はすき出版「仏教説話大系29」によつています。



都市化した環境に夕日が沈んでゆく。一心寺の西方。



お彼岸の夕日に室内が輝く一心寺日想殿広間。

特別寄稿

小泉八雲と 仏教

北山宏明

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、十九才の時（一八六九）英国から移民船で渡米ニューヨークへ渡った。二年後シンシナチイに行き窮迫生活（日記によるとホテルの雑役、道路掃除、ガラス拭き、商店のビラ貼り、屑拾い、賭博場の番人、墓地掃除等寝る処は廢の干草の上、紙屑の山の中等）、職を転々としながらも町の図書館を利用して知的欲望を充たしていたという。二十四才でシンシナチイ新聞の記者となり生まれて初めて給料を貰って買ったのが、バラモン、ヒンズー等東洋関係の本であったというから、この頃より仏教への関心が芽ばえ初めたと考えられる。しかし本格的に仏教に取り組んだのは、ニューオリンズへ移ってからと思われる。当時八雲は早くも仏教思想の哲学性に着目して東洋の古代思想の研究と近代西欧思想との比較研究を志していたようである。

特に一八八〇年三十才の頃、英國の詩人エドウィン・アーノルドの『アジアの光』という三〇〇頁に及ぶ叙事詩は、彼を大変感動させ、仏

教研究への大きな原因となったことが、当時の彼の作品から窺われます。

一八八四年（三十四才の時）彼はタイムズ・デモクラット紙に「仏教とは何か」というタイトルで仏教に関する論文を初めて載せている。

一八九〇年四十才となった八雲は、思想的一応の確心をもって来日したのでありますが、松江に在る間は仏教より日本神道の研究に没頭しました。仏教の研究は、熊本に移ってから神戸に至る間に専念し数多くの作品を発表しています。来日して最初の仏教に関する作品は『東の國から』（一八九五）の中の「横浜にて」ですが、老学僧との仏教問答は、フィクション的に構成された大乘仏教の解説書と言われています。八雲が三十二才の時知り合った親友であり心の恋人とも言われているタイムズ・デモクラット社の同僚記者エリザベス・ピスランド女史に宛てた来日の感動を添えた手紙の綴りに「私が今熱心に仏教研究に没頭していることは申すまでもありません」

と添書しているのを見ても訪日の目的の中に
仏教研究への熱情が感じられます。八雲が来日
して仏教に関心をもつて書いた著書は『知られ
ざる日本の面影』（明治27年著）『東の國から』
（明治28年著）『こころ』（明治29年著）『仏の畑
の落穂拾い』（明治30年著）『怪談』（明治37年
著）『日本——一つの試論』（明治37年著）『靈の
日本』（明治32年著）『日本雑事』（明治34年著）
（何れも出版はロンドンとニューヨーク）で、
八雲が逝くなつてから出版された『日本——一つ
の試論』は、彼の宗教観を集大成したもので、
神道と仏教の生成過程から祖先崇拜に於て両者
が合一して、日本人の信仰となつた歴史をスベ
ンサーの進化論的哲学によつて説明している。
例えば現在日本で行われている結婚は神社で取
り行い、葬式は仏教で行うことが当然になつて
いる習俗を肯定することができるとし、それは共
に祖先崇拜をバックボーンにしたものであるこ
とが了解できる。

キリスト教には祖先崇拜はない。古代ギリシ

ヤにあつた祖先崇拜は、ローマのキリスト教が
入つてきて祖先崇拜を異信仰として禁止してし
まつたからである。ところが日本では仏教の伝
来にもかかわらず、神仏が習合して祖先崇拜の
心情が残つた。だから八雲は、自分の国土の古
来からの民族信仰を強権をもつて変えてしまつ
たキリスト教を憎む。特に母がギリシヤ人であ
るという感情を強くもっているからでもあるが、
仏教の穏やかな布教伝道も、神仏の共存共栄を
も良風として肯定している。先祖の位牌や仏壇
を捨てさせたキリスト教の宣教師を憎悪し、そ
のような伝道をする限り日本にはキリスト教は
育たないだろうと言っているのもそのためであ
ります。

「今日の日本での先祖を祀るという家の宗教に
は厳格なところや莊重なところはない。ローマ
の祭りの特徴としていた、あの厳格な変な規律
などもない。日本の宗教はむしろ感謝と優しさ
の宗教なのである」

とかの有名な『古代都市』を書いたフェステ

ルド・ド・克蘭ジュの言葉を引用し

「もし古代ギリシャの都市の生活を考えて見れば、私達は今日の日本の家庭での先祖崇拜に比べても劣らぬほど朗らかな家庭の信仰を見出すだろう。日本の子供たちのように、祖先の靈に供えられたお供物を盗む機会をきつと狙っただろう。そしてギリシャの親達も日本の親のように子供をやさしく叱り、ばちがあたるといって先祖を敬うべきことを教えこんだにちがいない」

と言っているのであります。多神教は低級で一神教は高級だと考える文化人や思想家がいる。所謂進歩的と自称する人々であるが、果してそうだろうか。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教は皆一神教である。にも拘らず今世界を「戦争」で脅かしている国はみな一神教の国である。これらの宗教は自分の神、自分の教理が最高最上として譲ることがないし、争いは苛烈であるために愚かな悲慘を繰返えしている。一神教独特の高慢性は、寛容とか思いやりとか仏教独特

の慈悲の心などないように思われる。

ギリシャのレフカダ島のギリシャ正教の教会で結婚式をあげた八雲の両親の結婚は、母の文盲による原因でアイランドでの入籍届にサインできなかったことを口実に離婚させられたのであるが、実際は父の不倫と父側のプロテスタントと母方のギリシャ正教との対立による宗教の犠牲と言われている。長じてからこのことを八雲は知り、母への同情からキリスト教を終生恨んだのであった。

「仏教は慈悲という新しい福音を日本に与えた。最も高いことばの意味において仏教は一つの文化を促進させた方だったのである。人生に対する新しい尊重の念、人間とともに動物をいたわる義務、現世の行為は来世に実を結ぶということ。身に覚えのないあやまち、結果として苦しみを忍従してゆかなければならない義務」、そういうことを教えたばかりに、仏教は現実的に日本に中国の美術工芸を招来したのである。建築、絵画、彫刻、版画、印刷、園芸、一言で言えば、

人生を美しくするのに資する一切の美術工芸が、日本にはじめて発達したのは、みなこれ仏教の教えの影響なのである」(『日本——一つの試論』)

八雲は、仏教を研究するため、その頃既にヨーロッパで英、独、仏語等に翻訳され、印度のパーリ語サンスクリット語の經典も出版されていたので多くの仏教書を読んでいたことが、八雲の没後富山大学図書館に移ったその蔵書を見ても推察される。

『日本——一つの試論』(明治三十七年)の中の「大乘仏教」はスペンサー哲学と大乘仏教との比較に重点をおいているのであるが、興味があるのは日本人の宗教と西欧人の宗教の違いが、思想の象徴と様式でどれほど深かろうと両者が到達する道德上の結論は同じだということが結論になっている点だと思う。

「移りかわる現象以外に、恒久というものを認めず、常をみとめず、性格、階級、民族の差別というものを認めない仏教は、本質的にこれは許容の宗教である。悪魔も天女も、同じ業

がただ形を変えてあらわれたものにすぎず、極楽と地獄は、永遠の和楽を目ざして旅する道中の仮りの足休めにすぎない。万物の法則はただ一つ、不易にして犯すべからず、ただ一つの法則しか存しない」この「焼津にて」は最近中、高、大学の英文学科では有名になっている短編である。

精霊流しの小さな灯籠船が何十となく海流にのって沖に流れていくのを八雲は泳いで追っていく、浮遊する灯籠集団の中で、その美しい幻想的な光景に我を忘れていた時

「精霊たちが海をわたるときは危険だということとを、それとなく注意した昔の人の警告を、はつと思ひ出した。孟蘭盆の晩に海に出て精霊の灯の邪魔をしたり、そういう素振りや法によつて、悪人も善人になり、もっとも卑賤なものも仏陀になれるのである」(『霊の日本』)

と八雲は解説し、涅槃への道程を「大般涅槃經」の中にさぐっている。

明治三十年に出版した「仏の島の落穂」の中

の「涅槃」は、前述の大乗仏教（『日本——一つの試論』）と共に心血をそそいだ力作で、特に「涅槃」は脱稿まで三年間も要したというから文字通りの自信作といえるだろう。

明治三十二年出版した『霊の日本』の中の、「見せたりすると災難にあうというのである。

わたしはあわてて灯籠の灯に向かって、仏式のお別れの文句を唱えと、そのままいっさん、浜の方へと泳ぎ戻ってきた」（焼津にて）

仏式のお別れの文句とは「ナムアマダブツ」のことである。このあと浜辺で八雲の帰りを心配して待っていた乙吉夫婦に、

「盆の晩に海へ出なされるのはよくねえことぞござんすに」

と叱られるわけであるが、それは焼津には昔から盆以後は海で泳いではいられない。海は盆に帰って来てまた海へ帰っていく精霊で一ぱいになり、それを邪魔するものは連れていかれるという言い伝えがあるからである。

また「海には魂があり、耳がある」という言

い伝えがあり、親達は先祖代々子供達にこの諺（シンクス）を教え、海をあなどってはいけないことを戒めている。

この他『漂流』『浪除け地蔵』の地蔵信仰、七転八起の『乙吉だるま』など、仏教が庶民生活の中に入って精神的支柱になっているかを軽妙な文章（英文）で書いている。

八雲が帰化（明治二十九年）し入籍した小泉家は松江市の浄土宗善導寺の檀家であった。墓地は東京都雑司ヶ谷墓地にある。

正覚院殿浄華八雲居士 八雲 明治三十七年九月二十六日五十四才
本覚院殿浄華貞節大姉 セツ 昭和七年二月十八日六十六才
戒名は善導寺より下附された由

（静岡・教念寺住職）



念仏信仰の系譜

須藤隆仙

連載

日本編

六

最終回

●六人の高弟たち（承前）

聖光上人の法然上人讃仰は尋常なものではなく、「法然上人を以て大師釈尊と仰ぎ奉る」（『授手印』）とまでいっておられるのであります。その念仏に対する徹しかたは、「念死念仏」ということをいわれて、つねに死（無常）を忘れずに念仏せよ、「入る息、出る息」を待たず、助けたまえ阿弥陀はとけ」と念仏

せよと教え、「人ごとに閑居の所おぼ高野・粉河と申しあえども、我が身には、暁の寢覚めの床に如すとぞ思う」と仰せられて（勅修御伝・四六）、大安心に往することを教えられたのであります。

ご自身が若いとき聖道門を猛烈に学ばれた経験があるものですから、聖道門と浄土門とを兼学してみると、浄土門のよさがいっそうよく分かりますといっておられます。「不離

仏・値偶仏ちぐうぶつ』といつて、念仏によつて仏様と離れなくなることも教えております（『徹選ちてん釈集しやくしふ』）。

このようにして、堅実に法然上人の跡を継がれ、浄土宗第二祖となられたのですが、強いていえば、法然上人の行の面にやや重きをおかれたお方と見てよいであらう。

親鸞聖人（一一七三—一二六二） 〓今は浄

土真宗の開祖として広く知られておりますが、このお方も全身全霊を法然上人に捧げられたお方でありました。京出身の天台僧でしたが、二十九歳のとき法然上人の弟子になりました。「たとい法然上人にすかさませまいらせて、念仏して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず候」（『歎異抄たんいしやう』）という有名な言葉をのこしており、『高僧和讃』では「善導・源信すむとも、本師源空（法然上人のこと）ひろめずば、片州へんしゅう濁世のともがらは、いかでか真宗をさとらまじ」と賛えているのであ



ります。この前に「本師源空あらわれて、浄土真宗をひらきつつ」とありますから、親鸞聖人は自ら浄土真宗の開祖などと思つていなかったのでありました。「浄土真宗」とか「真宗」とかいう表現も、へ真の浄土宗」という意味でありまして、今日の真宗教団のようなものを考えておられたのではなかったのがあります。

よく、法然上人は「悪いことをするな、善いことをせ」式に常識的で面白くないといひ、その点親鸞さんは逆説的で魅力的だ、などという声を聞きますが、私には賛成できません。親鸞聖人として、「業あればとて、毒をこのむべからず」（『歎異抄』）といつておられるのであつて、法然上人の教えに非常に忠実であられたのであります。

五十二歳のとき草稿成つたといわれる『顕けん浄土真実教行証文類もんるい』（略称「教行信証しやうしん」）が主著とされるのですが、その後序には、朝廷が師法然上人や弟子（親鸞を含む）

たちを罪科に処したことを激しい語調で指弾し、法然上人を「真宗興隆の大祖だいそ」と呼び、自分は元久二年（一二〇五）師上人から『選択集』の書写を命じられ、この書を付与されたとして、その感激を名文で述べているのであります。親鸞聖人もまた、自分は法然上人のすべてを継ぐものとの自負を堅持していたのでした。

右のように、親鸞聖人は一宗を開く意志などなかったのですが、没後信者の集団がぼう大になり、今日みる浄土真宗という大宗派ができたわけです。そして少し前までは、残念ながら、法然上人と親鸞聖人の間には、教えに大きな違いがあるようにいわれていたのです。学校の教科書にまで、親鸞の教えは法然の説を進めたもの、というような記述がなされているのです。しかし最近はこちらと違ってきました。よく研究が進んだ結果、そんなに違いのないことが分かってきたのです。それはじつは当然のことなのです。親鸞聖人



の教えはみな法然上人から頂いてきたものであって、聖人の説は師法然上人の説のどこかにちゃんとあるのであります。紙数の関係上詳述できませんが、例をあげますと、最近話題になってます悪人正機説しやうきがそうであります。親鸞の専売特許ではなく、法然上人の説であることがはっきりしたわけです。念仏者は日常生活のなかですべてに救われているとする平生業成説へいせいごうじやうなどでも、法然上人は「臨終平生にわたるべし」（勅修御伝・二二）といておられます。念仏は報恩行であるとする称名報恩説も、法然上人はちゃんと「往生坐臥にも報ずべし、かの仏の恩徳を」（同）と仰せられておるのであります。

このようにして、親鸞聖人の信仰は、法然上人の信仰の部分を含んでいるものなのです。が、どちらかといえば、行よりも信の部分が多く頂いているといつてよいでしょう。

幸西上人（一二六三—一二四七） 〓 物部氏

の出といひ、比叡山南谷に住し鐘下房少輔と号したが、三十五歳のとき愛児をなくして法然上人の弟子となり幸西と称しました。一遍だけの念仏でことたりとする一念義の説を立てて門下を追われ、越後で布教します。法然上人没後の念仏弾圧で流罪になりかけたが免れ、晩年下総（千葉県）で布教したといひます。今でも、一念義を立てた背師の人のように扱われますが、法然上人も「行少ないとしても疑うべからず、一念十念に足りぬべし」（『一紙小消息』）といっておられるのですから、この説もやはり法然上人の教えの中にあるのです。ただ、付随した説（本迹説など）が問題となったようです。

隆寛上人（二一四八—二二二七） 〓京の少納言藤原資隆の子で、幼時皇円師から天台を学び、のち慈鎮和尚に仕えました。やがて法然上人の教えにひかれて弟子となり、『選撰集』を伝授されたのです。多数念仏を唱え



る多念義の立場をとりました。東山長樂寺に住んだのでその法流を長樂寺流といひます。師没後、奥州配流となりましたが、護送使が帰依してその領地相模（神奈川県）飯山にとどまり、ここで亡くなりました。法然上人は「一念なお生まる、況や多念おや」（『一紙小消息』）と仰せられているのですから、この義もまた法然上人のお説なのであります。

長西上人（二一八四—二二六六） 〓讃岐の伊予守国明の二男（三男とも）として生まれたが、十九歳で出家し法然上人の弟子となりました。法然上人讃岐へ配流のとき随従し、上人没後は他宗を学ぶことにも心がけ、道元禪師にまで学んでおります。京の九品寺に住んだのでその流を九品寺流と呼びました。念仏以外の諸行でも往生は可能だと説いたので、その教えを諸行本願義といひます。これは一見おだやかでない説のようにみえますが、じつはこれも法然上人の教えの中にあるので

す。上人は『無量寿経釈』の中でもそのことをいっておられますし、上人が感得して聖光上人が『授手印』の扉に記された「要偈」には、ちゃんと「諸行往生称名勝（諸行も往生すれども称名勝れたり）」とあるのであります。諸行でも往生するのですが、称名が勝れているのだということで、長西師は、諸行を目の敵にする誤を正されたのでした。



証空上人（二一七七—二四七） 二京の源

親季の長子として生まれ、九歳で内大臣の久我通親の養子となったが、十四歳のとき法然上人の弟子となり、以後二十三年常随しました。門弟中地位が高く、師上人『選択集』著述のときは出展考証役を務めました。師上人没後西山善峰寺に入り、天皇や貴族の尊信を得、その流を西山派といい、今は浄土宗西山派として、いくつかの分派をもっております。

証空上人の教えは、阿弥陀仏こそが衆生の行の基本なのだから、絶対の他力信仰でなけ

ればならぬ、というのでした。とにかく徹底した念仏による往生の信仰であります。そのため諸行往生を否定しました。たしかに、そういうたじユリタニズムを法然上人の教えの中から頂戴することも可能であって、証空師もまた法然上人の教えの部分の継いだお方といえるのであります。なおこの方や幸西師の思想は、親鸞師に強く影響したであろうといわれております。

証空師の弟子に聖達という方がおられ、この聖達の弟子が一遍師（時宗開祖）であります。ですから一遍は法然上人の曾孫弟子であり、証空師の孫弟子であるわけです。

●大念仏仏教

よく、仏教は、インドで発芽し、中国で花開き、日本で結実したといわれますが、念仏信仰もまた、そのとおりでありました。インドに芽生え、中国で開花し、日本で法然上人によって見事な実を結ぶに至ったのでありま

す。先程引用いたしました「要偈」の第一句は、「究竟大乘浄土門」であります。大乘仏教の究極としての浄土教、という意味であります。そしてその大乘仏教とは、これから仏教の進歩発達したすがたなのでありますから、その究極ということは、即ち「仏教の究極」ということであります。

こういうことを言うと、他宗の方で面白い方ではない方があられるかも知れませんが、それはそうではないのであります。今、私の手許に、文化庁編の平成六年版『宗教年鑑』がありますが、その統計によると、仏教で一番多くの寺院をもっている教団は浄土系なのであります。浄土宗・真宗・時宗・融通念仏宗などの総合されたものであります。

これは浄土念仏法門の拡がりを示すものでありまして、仏教の一大潮流といつてよいであります。法然上人が念仏信仰の実を完全化して下さいましたからこそ、こういう結果があるのであります。右に述べた門弟やそ



の流れは、結実した法然上人の念仏仏教から、一部分づつを頂いてきて、それをさらに開花発展させていったのでありますから、念仏信仰の流れというものは、法然上人以降は二次的に、演繹的に展開されていったものと言い得ると思うのであります。

法然上人はインド以来の念仏信仰を、きちんと整理されて帰納完結なされた、門弟たちは、そこから更に新しい発展をしていかれた、これが仏教における念仏信仰のすがたでありまして、その総体を「大念仏仏教」と申し上げてよいと思うのであります。

● 仏教の根本

最後に加筆しておきますが、法然上人の門弟の中で、源智上人（一一八三—一二三八。勢観房とも加茂上人とも）のことを忘れてはなりません。この方は、何と平師盛の子で、重盛の孫に当るのであります。源氏の追求を逃れるため、十三歳で法然上人の弟子となり、

上人没するまで十八年間常侍されたのであり
ました。とくに上人ご臨終のときは、「一枚
起請文」(上人の遺訓)を授けてもらって
るのであります。この文こそ念仏仏教の奥義
書ともいべきものであり、そういった意味
でも源智上人の存在は大きいのです。知恩院
や知恩寺は、法然上人を初代、源智師を二代
とするのであります。

浄土宗・真宗・時宗・融通念仏宗などは、
それぞれ代々を受け継ぐ高僧方に学徳の優れ
た方が出られ、その宗を各時代にマツチする
よう、教義を整理充実させていきました。例
えば浄土宗では三祖良忠師・七祖聖阿
師などがおられ、真宗では三世覚如師・八世
蓮如師などがおられます。今紙数の関係で、
これらの方々の思想内容にふれられませんが、
大変なお方々でありました。

時宗では一遍上人(一二三九—一二八九)
が、念仏札配りや踊り念仏など、凡夫庶民に
徹しきった教えを説かれ、二祖他阿上人も優



れた教えをのこされました。融通念仏宗では
七世法明師・四十六世融観師などが宗を興
隆させました(この宗は法然上人系と別です
が、いちおう記しておきます)。明治以降、
日本は世界の中の日本としての道を歩むこと
になるのですが、仏教もまた世界思想として
の確立が要求され、念仏信仰も当然その外
にあるものではありませんでした。そのため
各宗に優れた思想家・哲学者が出ております
が、それは割愛させていただきます。

最後にもう一つだけ加えさせて頂きますが、
念仏信仰の底流には、仏教の根本に棹さす、
という潜在的な自覚があることであります。
それが浄土系僧の活動となっているのであり、
例えば、『国訳一切経』だの『昭和新聞国訳
大蔵経』などの刊行は浄土宗の坊さんがやっ
ているのであり、仏教辞典の優れたものもそ
うであります。中央アジアの探検は真宗の坊
さんです。今後、そういった努力が必要で
ありましよう。

愛、いい響きの言葉ですね。

愛は私たち人間、誰でもが持ちあわせている基本的な心です。

夫婦、恋人、家族の愛情…。美しいではありませんか。甘い香りが漂ってきそうですが、どこい、これがまた大変な厄介ものであるのも事実です。

一口に愛とは言ってもこれには色々な意味が含まれており、仏教では大きく二つに分けているようです。一つは、喉が渴いてどうしようもなく水が飲みたいと思うような衝動的な貪り、執着の心。これは煩惱の一種としてみなされ、なくすべきとされています。もう一つは分け隔てのない、またみかえりを求めない慈悲の心。しかし、この二つ、常に隣り合わせ、紙一重で

若和尚の

六 其 し な は い い ト ッ ヨ チ

もあるんですよ。

ところで、皆さんが一番愛しいと思う人はだれですか。親兄弟でしょうか、それとも恋人ではないでしょうか。良く考えてみてください。大事な人を忘れてはいませんか。そうです。あなた自身です。自分自身が一番愛しくはありませんか？ 自分にとって一番愛しい人、それは自分自身であるというのが自然なのです。これはお釈迦様も認めていらっしゃることで、だから「自己を守りなさい」という言い方をされています。かと言って「自分が愛しいから自分を守る」ということが、何でも自分の利益に結びつくように好き勝手にして良い、というわけではないのは、もちろん言うに及びません。

お釈迦様はもう一歩進めて次のように説かれています。自分にとって自分こそが一番愛しいものであれば、他人にとってもやはりその人自身が一番愛しい存在なのである、だから他人を尊重し愛するべきである、と。

もちろんこの場合の愛は慈悲という意味ですね。「自分と他人」という言い方、分け方をしますが、他人を愛しむことは実はそのまま自分をも大切にすることにつながるのであって、これは仏教の「自他不二」という基本的な精神に根ざしているものです。

さて、私たちはその愛＝慈悲をどれだけ実践できているでしょうか…？

(正)

楽屋ゆかた



—
その十一

連載

中村助五郎

三

関 容子

助五郎が最初に手にした給金は七千円だった。

昭和二十九年の暮れに中村屋（勘三郎）に入門し、翌年三月明治座『檻』の酔っぱらい役で出て初めて役者としての人頭に入り、松竹から身（楽屋用語で給金のこと）が出た。

余談になるが私が初めて身上という言葉を耳にしたのは十五、六年前のある日のこと、小山三が浮き浮きしながら、

「今日はお身上だからあとでもらいに行かないきや」と、勘三郎の広い楽屋の次の間で、呟やいたときだ。お身上って？ と私が訊くと、あら、お給金のことですよ、と教えてくれた。あの日は初日だったから、役者の給金が興行月の前渡しであることもついでに知った。

助五郎が言う。

「七千円の給金の中からいろんな習いごとの月謝をはらいます。踊り、三味線、鳴り物……。

『自分ではらわれないと稽古が身につかないからね』って奥さん（勘三郎夫人）が。月謝は、役者だからってことで踊りでも何でも千円にして

もらってました。あとは昼御飯代を自分ではらうんですが、あの時分蕎麦の大もりもラーメンも五十円でしたからたいはいはどちらかでした。銀の塔のシチューは二百五十円もしたんでとても手が出ません。ところがあの店は因果なことに歌舞伎座の楽屋に限って出前するんです。今の団蔵さんが銀之助と言っていた子役のころ、よく三階へ遊びに来てましたけど、すると親戚に当たる八重之助さんがあそこのシチューを取っては食べさせてました。いい匂いがしてきて、ああ食べたいなア、と思いましたね（笑）」

そのおかげでのちに助五郎のシチュー料理の腕はプロ並になった。

そして助五郎は、二十九のとき仲助から山左衛門に名前替えて名題に昇進する。このころの活躍がめざましい。

『四千両』の伝馬町 牢内の幕あきは普通にチヨンチヨンチヨン……と折で開けないで、『ごせんとお（オ）』と長く引っぱる呼び声に囚人共が『お（オ）』と答えると、それからち

ヨンチヨンと刻んで幕をあけるんです。ごせん
どうは御洗湯でしょうか。身体を洗う湯をくだ
さるんですかね。とにかくその呼び声を師匠が
わたしにやらしてくださいって、なかなかよかつ
た、と褒めていただきました。それから国立劇
場が開場のとき（昭和四十一年）「菅原」の通し
が出たんですが、大序の大内山の場合は「忠臣
蔵」の大序同様天王立（下座音楽）であいて舞
台裏の東西声があるんですけど、師匠が「これ
にやらしてやってくれないか」ってわたしを推
せんしてくださいました。嬉しかったです」

東西声は、とーざーい、とーざーい、とのび
やかに五つ同じように言って、とーざーい、とーざ
ーい、としめくくる。しかし助五郎の山左衛門
は、以前、六代目菊五郎の台詞をつけた（プロ
ンプター）こともあるという作者部屋の竹柴定
吉（きち）という人から、昔はとーざーい、とーざーい、
と四つ言ったら、とーざーい、とーざーい、
という言い方もあったよ、と聞いて、そのほう
が変化がついていいと思い、その言い方で四、

五日つとめた。

「すると梅幸旦那が呼びだ、っていうんです。
『君、あの東西声誰に教わったの？』『はい、沢
辺（竹柴定吉）さんです』『ふーん、ぼくは聞
いたことないから違うんじゃないの？』とおつ
しやるんで、翌日から普通に戻しました。師匠
はそのことについては別に何ともおつしやいま
せんでした。そうしたら楽（やす）しくなつて、国立
の方が、褒美（第一回国立劇場賞）はあの呼び
声にやっていいでしょうか、って師匠の了承を
求めに来て、『おお、ありがとありがと』って
とても喜んでくださいました」

そのころ師匠の勘三郎は、山左衛門が何かと
よく気がつくので重宝がつか、名題披露もす
ませて三十代に入つた内弟子をなかなか手元か
ら離れたがらない。

「おれは三十五で結婚したんだから、お前もそ
うしなさい」

と勝手に決める。そのうちに、毎朝差し向い
で御飯を食べていた住み込みの事務係の女性が、

山左衛門が親切なのを好意以上と思ひ込、むひと幕もあった。

「奥様から、『お前、その気があるの?』って訊かれて、いえ、そういうわけじゃありません。実はそのころ、わたしはインド人の女に惚れてましたから(笑い)」

インド人、と聞いてピンと来た。勘九郎がよく楽屋へカレーライスの出前を取る昭和通りのナイル・レストランの女性?

「あ、よくおわかりで(笑)。わたしは顔は二枚目じゃありませんが、気持ちで行くほうで、

昭和37年「血笑記」の勘三郎師匠(中央)と助五郎(左)。



昭和29年7月、名題の口上を師匠の勘三郎と。(歌舞伎座にて)

その気持ちについてきてくれる女の人もあるんです。でもそのインドの女の人十五も年上とわかって、わたしはそれでもかまわなかったんですが、さすがに相手は落着いていて、

『でもね、今はいけど、あなたが五十五の男ざかりのときに、あたしは七十よ』って言われてハッと考え直しました。しばらくして今度は十歳下の女の子に惚れまして、それが今のかみさんです」

その女の子は今の富十郎が竹之丞時代の女弟子で、芸名が坂東竹の子。踊りは富十郎の母吾妻

徳穂の門下で、吾島春千穂の名をもらっていた。

「天王寺屋（富十郎）さんはよくあの時分師匠のうちへよくいらつしやつて交流がありましたからね、『若旦那、あの人誰ですか？』『誰って、多くの内弟子だよ』『いいですねえ』『あ、そうお？いいよ、いつでも紹介してやるよ』って。かなり地味な恰好してましたからもう三十くらいかな、と思つてたらまだ十九と聞いてびっくりしましたけどね」

助五郎は年増好みだったのかもしれない。

そこで師匠の言いつけを二年早めて、三十三歳の暮れに結婚する。仲人はもちろん勘三郎夫妻だった。

「十二月二十九日に式を挙げましたが、この日は師匠の結婚記念日なんです。それから毎年その日に『おめでどうございます』を言うど、『あ、お前は憶えてるよね』って。そうそう、仲人のお礼には田舎の両親が鳥取ではこうするから、と言つてお米を一俵お送りしたそうです」

そして山左衛門時代の終わりごろ、思いがけ

ない大役が回ってきた。昭和五十年六月の歌舞伎座 萬屋錦之介公演で、山本周五郎作『泥棒と若殿』の泥棒役に抜擢されたのだ。

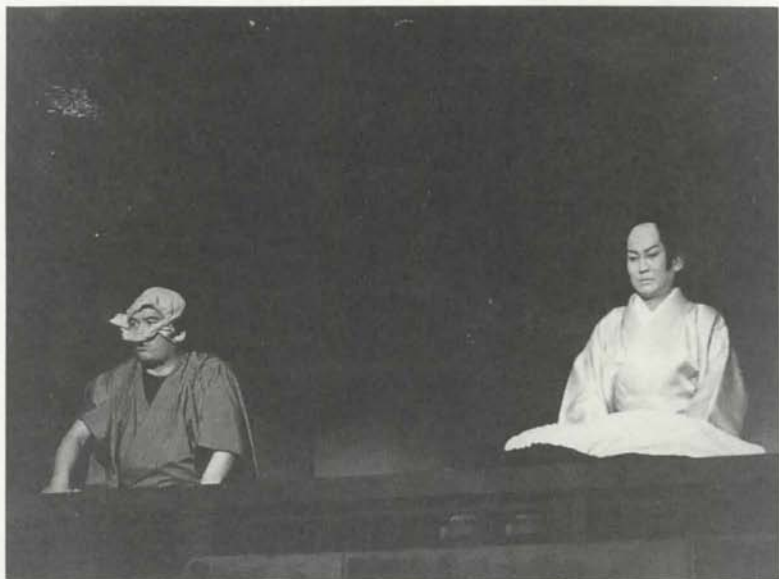
「若殿の役は賀津雄さんで、相手役の泥棒は子団次さんでしたが、交通事故で急に休んでしまったんです。それで錦之介・賀津雄御兄弟のお母さん小川ひなさんが『誰か泥棒みたいな人ないかしらねえ』するとうちの奥さん（勘三郎夫人）が『それならうちの山左衛門よ』（笑）それで決まったそうです」

この芝居は、若殿が幽閉されている山荘にしのびこんだ泥棒が、若殿の境遇に同情し、二人の間に奇妙な友情が芽生えるという話で、ほとんど二人きりの一幕ものだ。幕切れは城へ帰る花道の若殿を、泥棒がただ一人、本舞台で見送る。

当時の新聞評でも、

「平名題の役者が幕を切る役をつとめたのは前例がない快挙」

「賀津雄の若殿どがっぷり組んで実力を発揮した山左衛門に拍手を送る」



昭和50年6月、「若殿と泥棒」で賀津雄演ずる若殿の相手役、泥棒を演ずる山三衛門。

と褒められた。

「急に代役が決まったとき、以前泥棒の役を富十郎さんがなさったと聞いて（若殿役は林成年）、『若旦那、ちょっと、伺いたいことがあります』って言うと、女房と一緒に六本木のキャンティに招んでくださって『あれはこういうふうやればいいんだよ』と教えてくださったって、『さあ食べよう食べよう』ってスバゲッティ御馳走になって帰ってきましたが、まだ不安で不安で……」

この元内弟子の大役抜擢に、中村屋一家はみんな協力した。そのころ二十歳だった勘九郎若旦那は、稽古の若殿役を買って出て、相手をつとめてくれたという。

深夜、山左衛門が立ち上って勘九郎に短刀を突きつけると、これは御主人の一大事、とばかり犬が飛んできて吠えついた。きつと迫真の名演だったのだろう。

「師匠が麻雀好きなんてロンという名前の小型犬でした。吠えられて、ちょっと自信がつかしました（笑）」

（エッセイスト）

本誌八月号33頁5行目の昭和33年は昭和30年の誤りでした。訂正しお詫びいたします。

表紙は語る
共に生きる
ブナ原生林から

●
本誌表紙写真／文
御所野洋幸

森は水を貯え、土壌を作る。

地球の温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることを抑えて洪水を防ぐブナ。

果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育てるブナ。

森の母、森の医者と呼ばれるブナ。

そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。



日本各地の古い神社は、山を背にしたり大きな岩があったり、標繩をはったおおきな木があったり、又は村や町の中を流れている川の源近くにも社や祠があったりする。

浅い信仰の私には山岳信仰、巨木信仰がいつの頃からかわからないが、日本各地に今も残っている。

三十年ほど前に特別天然記念物に指定されている名木の撮影を何度かしたことがある。

ほとんどもが標繩をはっていた。それぞれが「ふうーっ」と驚嘆させられるみごとな巨木で圧倒され、何所からどのように撮ったらよいものかと苦勞したことを思い出す、中でも香川県小豆島の『宝生院のシンパク』（横柏とは柏ビャクシンを逆にした美称）樹齢千五百年以上で、日本のイブキの最大のものである。応神天皇のお手植といわれている。幹は地上約一メートルの所で南方、西方、北方の三方に向かつてのび根本の周囲十六・六メートル、三本の支幹は同じ太さで七メートル、幹の根

本は空洞になっているが枝も葉も茂り壮観な姿だ。

これが千五百年以上も生きている木、そしてまだ生き生きている。不思議な気持ちで側を去りがたく長時間シンパクを見入っていた。今思うとあの時樹霊を感じていたような気がする。

シンパクもそうだが大きい木は中が空洞になつているものが多い、皮だけで生きているように見える。樹皮だけで根や茎や葉を成長させ、時には自分で枝を落し余分な所を捨て廻りの木々と協調して生きている。自然の力なのか木の知恵なのかわからないが、木は不思議な生命力をもっている。

私が撮り続けている原生林のブナは樹齢四〜五百年のものが古木で大木とよんでいる。それぞれが樹霊を秘めている。と私は思っている。それは霊気をもって近よりがたいと云うのではなく、遠い先祖に会っているような気持ちなのである。ブナの木を撮影する時、



アップ・ポートレート・集合写真・家族写真
など人物写真を撮る時と同じ気持ちで木に接
している。それで当然木には手をふれ、話し
かける。六月におばちゃんの木に出会ってか
ら、この地に来るとまずおばちゃんの木に挨拶
をして、おばちゃんの木ポートレートを
撮る。それから林の中の撮影がはじまる。

九月十六日、一ヶ月前は緑一色だった森も
ポツポツと色が着きだした。緑の時は葉は水
分をいっぱい含んでふくらみ葉脈は凹んでい
る。それがこの時季水分が少なくなり葉は薄
くなつて葉脈がもり上がる。そして葉先から
黄色に変わりはじめる。水分が少なくなつて
軽くなった葉は風でゆれカサカサと乾いた音
をたて秋の感じを強くする。

初秋の山は、天候不順や台風の影響・酸性
雨などに会わなければ確実に美しい姿を見せ
てくれる。ブナは枝先の方から黄色になり、
カエデやウルシは赤になり、山間にはリンド
ウ・毒草のトリカブトは美しい紫の花をつけ、



カマズミ・ナナカマドは赤い実をいっぱいつける。少し開けた所にはキク科の花とオミナエシが黄色の花をひろげている。木々に絡みついた山ブドウは濃紺の実をあちこちに下げている。足元では蟻達が落ちてはじけたブナの実をせっせと巣穴に運んでいる。林の中は休むことなく動き続けている。近くでカナカナと蛸ひぐしが鳴いている。カメラを向けた、逃げられた。今日の撮影は終りにした。

最盛期は十月に入ってからだが、この山の人気のキノコ、サモダシ（ナラタケ）が出はじめた。林の中はオーイ、オーイと呼び合う人の声で賑やかだ。私が入山して写真を撮っている事を知っている人が多くなり、時々食料の差し入れがある。今日は缶ビール・トウモロコシに鳥の空揚げ、残りものですがどうぞとメモがある。名前に佐藤とある。

満天の星空の下、焚火はホロホロと燃え一人て幸せな気持ちにひたる。

あとねじょうじ
後根定璽
佛敎大学ロサンゼルス校 主幹



外から見た 日本

ロスアンゼルス・ダウンタウン（商業区）
に隣接するリトル・トウキョーの只中に、北
米浄土宗別院・佛敎大学ロサンゼルス校を
有する、モダンな二階建てビルが誕生して、
ちょうど三年が経った。外回りの植木を程好
く大きくなり、色鮮やかな草花が、参詣者の
目を楽しませてくれる。館内も設備の充実が
着々と計られ、落ち着いた雰囲気の中にも、
人々の出入りが日一日と多くなっている。

この三年間、ロスでは色々な出来事が立て続けに起こった。落慶・開校式当日の地震、人種間の小さな事件をキッカケに勃発した暴動、東京都の面積に匹敵する山火事、ノースリッジ大地震、ワールドカップサッカーの開催、洪水、日本企業の撤退、そして現在、元フットボール名選手O・J・シンブソンによる複数殺人（元妻とその友人）容疑裁判が、人種問題と司法制度と云う観点から、全米の注目を集めて進行している。アメリカも日本も、そして世界が激動の波に揺れ動いている今日の様相である。

この度、『浄土』編集部から外から見た日本について随想を書けとの指示を賜った。そこで、ロスにて時折思うことや、アメリカ生活での経験等を、ここに紹介させていただく次第である。

世は昏迷の時代を呈している——と思うのは私独りではないであろう。世界では、あら

ゆる所で地域紛争・テロ事件・経済摩擦、人権問題等を基としたさまざまな事件が、一日として起こらない日は無い。日本においてもバブルの崩壊・兵庫県南部地震・オウム真理教サリン事件・そして増発する凶悪犯罪など、本場にこれが世界で一番平和な国の姿かと、疑問に思うようなニュースが続いている。

こうした混沌とした様相のもと、自国の将来進むべきビジョンが、国のリーダーよりはっきり明示されないことは、一国民として不安であり不幸でもある。日本のみならず、アメリカを始め世界各国が政治的混乱に陥っており、明日の進路も暗中模索の状態にある。ただ明白なことは、この混乱の始まりが、超大国アメリカと旧ソ連の力関係の崩壊であったと云うことである。

冷戦時代の世界は、この両国を柱とした自由主義、共産主義と云うイデオロギーの相違によって二分されて来たが、旧ソ連の解体により、世界地図が新たに塗り替えられること

となった。良し悪しは別として、両国によってもたらされた極度の緊張は、一定の秩序を世界に与えていたのである。

レーガン大統領時代のアメリカは、旧ソ連に対して、決定的な軍事力優位を確保するために、自国の軍事予算の増加を続けた。国民は、経済的負担と懷疑心を持ちながらも、ソビエト脅威論の前に、大統領の強力な政策を支持した。やがて、ベルリンの壁が崩壊し、湾岸戦争での勝利を収めると、アメリカ国民は、一変して、内政(特に経済問題)に目を向けるようになった。失政なきブッシュ政権からクリントン氏への移行は、こうした理由によるものである。

だが、若いクリントン政権には、議会を動かす力も無ければ、良きスタッフにも恵まれていない。よって、外交政策のもたつきと、経済効力のなさから、国民より選挙において厳しい判決を受けた。大統領は民主党、議会多数政党は共和党と云ったねじれ現象が生じ

アメリカの政治も混乱を招いている。

しかし、旧ソ連の解体に端を発した政治的混乱は、アメリカだけの症状ではない。ヨーロッパ諸国・南アフリカ・アジア、そして日本をも含め、世界各国が直面している緊急課題である。政治家は、懸命になって明日の自国の展望を模索している状態にある。

世界が未知なるベールに包まれている時に我が国の政治のみが悪いとは、決して断言出来ないと思う。

さて、イデオロギーによる対立の時代は終わった。代わって、新たに台頭してきた現象が、経済による対立である。先の湾岸戦争はアラブの石油資源が主な要因であった。そして、最近は領土問題・武器輸出・通貨危機、貿易など、経済に関連した問題が大きくクローズアップされるようになって来た。日米間の車、航空摩擦もその一端である。もはや、資源・生産・販売までを含めた、広域な総合

的経済活動の基盤を確立することなしには、
一国の経済安定を実現することは難しい。グ
ローバルな経済基盤を構築し、相互依存的関
係の中から、お互いの繁栄を築き育ててい
かなければならない時代に突入したようである。
現在、ヨーロッパ、北米、アジアの諸国が経
済同盟の拡張を行なっているのがその典型で
ある。今までの日本のように、一国繁栄のみ
を基とした政策では長続きしない。もっとグ
ローバルな、より長期的視野に立った新しい
経済理念を必要とする時代を迎えたようであ
る。

ところで、戦後の日本は、飛躍的な経済の
発展を成し遂げ、世界有数の経済大国となっ
た。これは偏に先人の努力の結晶であり、そ
れを支えた日本文化の賜物である。各家庭に
は、カラーテレビ、エアコンが備え付けられ、
休日にはマイカーでドライブを楽しむことが
できる。交通機関の発達は、おそらく世界一
であろう。建物の広さは別として、家具、電

気製品、衣類と云う点では、アメリカ一般家
庭以上である。風呂の蛇口をひねると、シャ
ワーのお湯がふんだんに出て来る。本当に有
難いと思う。

しかし、経済の発展によって、便利さと快
適さを手に入れた私達は、同時に、終りの無
い執着との戦いを続けていかなければならな
い。何故ならば、資本主義の経済理念は、消
費者(人間)の物的欲望を、これでもか、こ
れでもかと、より一層掻き立てることによっ
てのみ成立するからである。国の繁栄は、経
済の発展とほぼ正比例して進んで行く。だが、
皮肉なことに、「欲望を上手にコントロール
せよ」と説く仏教の教えと、この資本主義の
理念とが相反する性格を有していることを深
く肝に命じて生活しなければ、果てしのない
欲望の泥沼に落ち入ることを決して忘れては
ならない。

◇ ◇ ◇
「二十一世紀は心の時代である」と各界の

人々が異口同音に唱えている。物質的繁栄によっても心を満たされない人々が、精神的安定を探し求めている。オカルトや占いの流行は世相の反映である。ある若者は、新宗教に生がい求めて走り、あるいは、新しい価値観を模索するために海外へと飛び立つ者もある。今度のオウム真理教による悲しい事件も、こうした時代背景抜きには考えられない。

バージニア州ウィリアム・エンド・メリー大学での宗教の講義の折、日本文化は物質的か精神的かと云うディスカッションがあった。学生の意見の多くは、「東洋の神秘性と仏教に支えられた日本文化は、多分に精神的であろう」と云ったものであったが、バンホーン教授は否定した、「茶の湯の茶碗一つが数万円もする文化は精神的では無い」と。まことに、示唆に富んだ言葉であった。

ウィスコンシン大学のトーマス元教授(英文学)は齢八十余才。引退後も「社会にお世話になったから」と、学生の論文指導をボラン

ティアとして続けられている。彼女は、「現在のアメリカ教育で欠けている点は、学問の中で人間としての基本的な生と死の問題が素通りされている」と指摘された。確かに、論理的思考による知性の重視のみでは、人間の根本問題は解決しない。そればかりか、行き過ぎた論議の展開が引き起こすものは、果てしのない論争と破壊でしかない。西洋の歴史がそれを物語っている。ある時、彼女はつづやくように「六十を過ぎたアメリカ人が集まると、如何にボックリ行くかが話題の中心よ」とも話された。核家族化の進んだアメリカ老人の生活は、とても厳しく淋しいものである。

もう二十年近く前のこと、ハワイで故佐藤治子先生(当時浄土宗寺院婦人会々長)よりハイランド御夫妻(元米国海軍第七艦隊司令長官)を紹介いただいた。インテリで日本文化に興味を持つ同夫人は、「美しい日本の言葉は、おかげさまでとまったくいい」と二つ

誉げられ、前者を“Thanks to whomever and whatever” 後者を“Much too good”と訳された。「西洋には、相互関係による物質の存在はありませんし、生きとし生ける全ての物に対して、深い感謝の意を表わして生きていく言葉は、英語にはありません」だから、この二つが美しい日本の言葉です」と説明された。佐藤会長の話によれば、ハイランド夫人は、宇治平等院阿彌陀像の前で、仏様のお顔をじっと一時間以上も見つめておられたそうである。



北米浄土宗別院に、法然上人の御影が飾られている。その御影を拝見する度に、柔和なお顔と、深く澄んだ瞳に魅了される。ギリシヤ神話に出て来る力強い神々のお姿、十字架に磔にされた悲しいイエスのお姿、また知性溢れるリンカーンの姿とも異なる。法然上人のお顔は、念仏によって得られた仏の慈悲。そのものの具現であり、慈悲は時と所を超えた

永遠の真である。

世の中が混乱し、人心が不安定な今日こそ、慈悲心による実践が新たに必要になっていていのではないだろうか。

ロサンゼルスに三年、留学時代から数えればもう二十年にもなる。日本に暮らしていたらきつと感じることができない、世界的な視野で日本の動きを見ることができるようになったと思う。そして、日本もそうした世界の動きの中で動いていることがよく分ってきた。

日本には「井の中の蛙 大海を知らず」ということわざがある。日本がそうならないように願うとともに、ハイランド夫人の言葉にあるように、日本人のもっている素晴らしさを失わずに、世界に進出できる日本人であってほしいと期待している。

新宗教と現代社会

オウムの危険信号を どう受け止めるのか

前編

大正大学非常勤講師・東京竜泉寺住職

武田道生

平成七年七月一日

法然上人鑽仰会 定例総会 講演会より

家 制 度 の
崩 壊 が
オ ウ ム を
産 ん だ

去年から二つの大学で宗教社会学を教えています。その両方の大学とも今年から学生数が急激に増えました。去年はともに三十人位だったのに今年は百人と二百人と突然増えました。この現象は他の大学でも同様で、今の若い学生に、宗教とはどういうものなのかという関心が非常に高まっているようです。その理由は自分はオウム真理教のような宗教には入ろうと思わないし関心はないが、ああいうところに入って出家してまで宗教を信じようとするその気持ちを知らりたい。そういう理由で宗教に関心を持ったようです。自分の友達を含め、同世代の人たちがなぜああいふ宗教に入信するのか、そのことに関心を持っているんです。

また、ある新聞社のアンケートの結果ですが、宗教は人生にとって必要か、という質問に対し、必要だと思う者は20パーセント位。これは過去十年間減り続けて、20年前と比べると半分ぐらいの数字です。宗教とはどうい

うものか、という質問には、宗教というと教団型の宗教で、そのイメージはお金に非常に汚く、いつもお金を集めるという答えが一番多くて約半数。次は人を不幸やたたりでおとし入信させ集団活動させる、がおよそ3割でした。まさに悪いイメージだらけで、宗教心とか信仰心といったものとは別なレベルでの、社会組織としての宗教に対する不信感、絶望感、拒否感が非常に強くなっている。

しかし一方ではオカルトとか、輪廻転生とか、霊界の存在とか、それこそ写真を写してここには霊が写っているとか、言わば見えないう世界には関心が個別化してはいいるものの強まってきています。本来、宗教集団に入っでそこで生きがいを見つけ出すことが宗教なんですけども、一般の人にとってはどうもこれは宗教ではない。宗教的現象らしきもののに興味を持つことが宗教ということのようです。ではなぜ、このような宗教観を持つようになったのでしょうか。これはおそらくは

明治から始まったと思っています。産業構造の変化と明治憲法の制定によるのではないのでしょうか。

明治維新で失ったもの

明治憲法制定でわたしたちが失ったもの、何だと思いますか。それは徳川幕府が三〇〇年かけて作りあげた家制度です。旦那寺があつて壇家があつて、そして嫡室嫡男、男の長男がその家を継ぐ。家を継ぐとは祭祀継承権、仏壇と位牌と墓を守っていくということです。同時に家を支えている農地とか土地とか財産というものも受け継ぐ。そしてそれらは決して個人のものではなく、先祖代々ずっと伝わってきたものであり、次の世代に伝えていくべきものなのです。例えば私、武田という家は、今家庭としてある家ではなくて、先祖代々様々な人たちが作りあげて、それを次の世代に、次の世代にと伝えて来たものなんで

す。今はその流れの上で一番先端にいます。それは子供に伝えるべきものであり、決して個人のものではないということ、ここが一番重要な問題なのです。それが明治維新で境に失われてしまった。

そして明治以降の近代化で日本は農業国家から産業国家に変わりましたが、農業というのは人間の労働力が非常にたくさん必要だったのです。だから大家族制だったんです。次男、三男にしても、分家してもすぐそばにいて、本家の土地を耕したり、分けてもらったりする。つまり完全に独立するのではなく、あくまで助け合つて農作業を行ってきた。それが明治に入つて産業を発展させるために工場労働者が必要になつて、農家の次男坊、三男坊が家から離れることになる。農家にしかなかった労働力が都市に集中することになる。全国各地に工業都市が出現し、そこにどんどんと人が移住し始める。

この現象が進んでくるのが第一次世界大戦

の頃、つまり大正から昭和にかけてです。都市の世帯が非常に増え、明らかに農業よりも工業が優先されてくる。

こうなるとどうなったか。それまでの家が崩壊し、新しい家作り始められたのです。農家の次男坊、三男坊が田舎から出てきて、そこで新しく「家」を作り始めた。どのような「家」というと、まず寮に入り、アパートに移り、借地の上に家を建て、やっと子供をつくる。この人たちにとって感謝すべき対象は何か。その家を伝えてくれた先祖か、農地を残してくれた者なのか、違いますね。彼らにとつて感謝すべきものは妻であり、夫であり、つまりお互いなんです。それはそうでしょう、だって自分たちだけで作り上げてきたんですから。先祖に感謝しない「家」がどんどん増えてきたわけです。

都市で初めて初代本家となる「家」を作り始めた人たちは伝統から断ち切られてしまった、いわば先祖から断ち切られてしまった人

たちなのです。そう、先祖なき家の誕生です。さらに民法の改正もこれに拍車をかけた。

嫡室嫡男が継いできた親の財産は子供に平等に分配されることになり、子供が五人いたら平等に五分の一ずつ。もちろん奥さんは三分の二とか半分ですが。基本的にはその「家」に伝えられた財産が個人のものだという法律になってしまったんです。財産は「家」のものではない。これは決定的な意識の変化を否応なしに産みました。

お父さんの名義だったものなんだからみんな子供で分けてしまえということになるんです。先祖という縦の繋がりをその一代で全部断ち切ってしまったんです。

ところが私たち伝統仏教はそのことに全然気がつかなかった。単なる法律的な問題だと思ってきたんです。

もっと早く気がつくべきだったんです、この問題に。お寺さんも、浄土宗という教団も。だって伝統的な教団、私たちの仏教というの

は、お葬式や法事を行っているときに、宗派の教えを伝えるということよりも、先祖がいて私たちがいることに感謝したり、人間関係の繋がりを確認する重要な儀式としているのではないのでしょうか。だから、どの宗派もみんな原始仏教のような因果論、縁起の法則ということを、そのまま縁とか、おかげさまなんていう言葉で説いているわけです。宗派仏教とは基本的にかかわらない縁起ということを説いているんです。

時代を捕らえた新興宗教

ところが一方ではこうした状況を的確に読んでいた宗教が出てきました。それは昭和のはじめ頃に出てきた宗教です。これはいわゆる霊友会系の宗教で、霊友会、立正佼成会、仏所護念会など、法華経を中心とした宗教です。しかし、日蓮宗とは違い先祖のおかげを大切にします。人間の結びつきの中で私たち

が生きているという非常に狭い、いわば家族の中での人間、そして先祖へ信仰心を向ける宗教なんです。これは創価学会とは基本的には違います。何が違うのか。今言ったことがらすれば私たちと同じように思われるでしょうが、夫婦の両方の先祖を祀ります。必ず仏壇の正面には掛け軸が掛かっていて、それには夫婦の両方の家を書いてある。何々家何々家先祖代々。まず一番重要なのは家族、夫婦なんだという。そしてその夫婦の存在を互いに認め合う。家を作っている家族が出发点なんだという考え方、それが絶対的なんです。これはまさに時代の変化にぴったり適合しました。

いわば都市型の先祖、都市型の宗教なんです。都市型の宗教と言うと、都会に本山があつて都会の人を中心に布教している宗教のようには思われますが、伝統的な農村型の宗教とは先祖観が違ふ。非常に直接的に結びついた先祖観で、まさに今からさかのぼっていく先

祖なんです。この感覚の違いは決定的です。こういう形態の宗教は、戦後さらに広まりました。

今の墓地の不足の状況をみればわかりますが、皆、初代が本家になってくる。昔だったら一つのお墓に皆入ったのに、今は独立するとみんな新しい墓地が必要だとおもうわけです。自分たちが住んでいる家があるのと同じように、自分が死んだら本家や兄の墓地と一緒にというのではなく、自分たちの新しい墓地が欲しいということです。常に初代本家なんです。

オウムと戸塚モットスクール

人間の結びつきも同じです。宗教というのは本家の宗教、親の宗教がこうだから自分もこうだという意識が強かったわけです。つまり一つのつながりとして考えてきた。人のつながりの絆になっていたんです。ところが親

の宗教と関係なくてもいいという人が多くなってきた。子供がすぐ墓参りできるところとか、近い方がいいとか、どうせうちは親と住むわけではないからうちほうで新しくやるんだというような考え方です。本家、分家というような感覚がない。親子のつながりさえ認めない、意味がないというように思っている。自分たちから始まっているという意識が非常に強いんです。

これはさらに究極的な形で現れた現代の若い人のものの考え方ですが、彼らにとってお寺や霊園は死体を処理する場所ではない。形としては仏教でお葬式をやりたいといいますが、もともとあった仏教でお葬式をするというこの意味とは違う形になってきている。戦後のアメリカ型の教育を受けて非常にクールに冷めた目でものを見る人たちができてしまったときに、ものすごく意識の断絶ができてしまったんです。

こういう変化について行けていないのが私

たち既存宗教の問題点ではないでしょうか。同時にこうしたところを的確に捉えたのが、オウム真理教なんです。

日本では高度経済成長の中で親の世代と子供の世代との価値観のずれが明確に出てきました。ちょうど校内暴力とか登校拒否といった子供がではじめたのは第二波ピーブームといわれた子供たちです。その子供たちの親は子供をうまくしつけられないんです。ただ頑固なだけで、理由も説明もしないでこうやれと言ったり、目に見える形をとるとすれば出世しろとか、俺より偉くなれとか、自分は行っていないからお前は大学へ行けとか、単なる押付けだけ。これでは子供たちの拒絶反応は強くなる一方です。

戸塚ヨットスクールなんていうのも登校拒否、暴力問題のある子供たちを集めて再教育するなんていわれた。あれ自体が今回のオウムの事件と重なってくるんです。大きな流れとして見れば同じ現象だったわけです。戸塚

さんは何をやってたかという子供たちを完全に親元から隔離して、学校生活も日常生活もさせないでひたすらヨットだけをさせた。ヨットで自分が死と向かい合う。ヨットを操縦させることで、自分で自分の人生を動かしていくことを覚えさせようとした。いわば自己コントロールです。自分が技術を磨いて死と立ち向かわなければ、人との甘い関係なんか断ち切れないんだという彼のやり方、それは暴力を使ったスパルタだったのです。

体を使って生きている実感、生きるこの意味を悟らせる、これはまさにオウム真理教のやり方と全く同じです。戸塚さんのカリスマ性というか暴力性というのは、絶対的な権限、強い力で例えば拷問のようなことをやってたわけです。すさまじい体罰を加えたり。それは親たちが自分たちでできなかったことを人に押しつけていたわけです。あそこで立ち直った子供たちもいっぱいいたわけです。親たちがへんに悟り切ったように、暴力はい



伝統教団へ警鐘を鳴らした上、新たな方向性まで提案された武田道生師。

けない、話せばわかる、と子供たちに言っていたのに、子供たちからは拒否をされた。しかし、現実にはヨットスクールの方法論も子供たちが求めていた人間のつながりのひとつだったんです。それはオウム真理教でも同じだったのです。(以下次号)



本年7月1日、増上寺で法然上人讃仰会の総会が行われ、講演いただいた。

以前書いたこのコラムにクレームがついた。と言っても仲間内からのもので、確かに稚拙ゆえのもので、誤解をされて仕方がない表現だった。

事と次第によっては縁を切ると思気込んだ彼だが、なんとか今でも続いている。

しかし、表現とか言葉は本当に言い方ひとつ、ということを実は先日とも思ひ知らされた。

山登りならぬ、沢登りを友人2人とした時のこと。完全廻行

(川を源流まで歩ききること)の途中で、食料をチェックした友人がこう言った。

「もう半分しか残ってないぞ、食い物」

もう一人の友人が答える。

「ダメダメ、そう思っちゃ。ま

だ半分ある、って思うんだよ」
もう半分、と
まだ半分。

その時はもう半分だろう、つと口には出さずに思っていたが、よくよく考えてみると、この「もう」と「まだ」にはとても大きな違いがある。

「もう」はネガティブ、

「まだ」はポジティブ。

「もう」は暗澹たる未来を「まだ」は洋々たる未来を感じさせる。

いまこのコラムを読んでいる貴兄貴女にお尋ねします。

「あなたはいままでの人生の outcomes、未来をまだあると考えてきましたか、それとも、もうないと考えてきましたか」

きつと年齢や性別に関係なく

「もう」派と「まだ」派

二分されるでしょうが、おそらく「もう」派の方が意外に多いのでしよう、今の日本には。

あつ、これも「もう」発想。

それにしても「もう」と「まだ」ではまさに百八十度違います。

突然ですが、今にその名を残すような人たちの多くは「まだ」派でしょう。そしてごく僅

かが徹底した「もう」派ではないでしようか。

法然さまは、お釈迦さまは、イエスは、マホメットは、あるいは聖徳太子は一体どっち。

四六時中、「まだ」と考えた

ら、何でもできそうです。お坊

さんは「まだ」派であるべきで

すね。いつまでも「まだ小僧」

ってのがいいですね。(洋)

FORUM

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

その坂東武者は如何にして夏を死の容器とすることなく
やがて黒谷を訪れたのかに關する試論 序章
あるいは入水断念

老取亜門（浄土詩人会議）

くきやかに

訣別していくような夏の光

の線のないのち曳いて

動くまい まだ

じつと溶けまいとする肉腫ひとつほど

が己れの全身の眼

無時間の

白砂 無音の風景を仕切る

海岸線それは張りつめた腫瘍突き抜ける果てしない

陣痛だ！

臀部ぬるみ

脊背なる樹林ほどけ

眼前

まったくの海の溶解であるとするならば

白昼

おまえは微温旋律!

ふるえる恥毛の揺籃だ

へおお そんな逆撫ての世界の中心を

もののふ喰ちる

虚空の憤怒に喰ちていくのに

いま眼球溶けず

凝視なおも疾走する それは

点滅を不連続する死への

橋なのか誕生なのか未練なのか蓋なのか

けれどおよそ

軌跡は虹

遠く海上へ消えてゆくから

己れの視線の行方に耐ええぬ肉腫腐り

ゆるゆると腐り

やがて緩慢な腐臭のなかに

落武者一騎 静止する それは

漆黒の甲冑に汗ばむ臓器の病歴 喜びの影であったのか

しろじろと

和解していくような夏の光

球的のなかくて

動くまい まだ

つれづれなるままに

名句・秀句と我が拙句人生

酒はその発生以来ずっと人類の友人であった。私は友人を裏切ることができない。

なんちゃって。どうもこの三〇年、こんなにいい加減な言い方を武器として、私は酒を呑み続けてきたらしい。

不飲酒の戒のこと、不許入堂酒山門などという文字の彫られた門前の石碑のことなど、それでも時々思い出しては深く反省することもあるのだが、そこから先、どうも思考が実を結ばない。

貴誌即ち月刊「浄土」8月号のコラム「若和尚のチョットいいはなし其五」の（正）氏には「修行が足らん！」と怒られてしまうだろうが、しかし、こんな場合は少し許して貰えるのではないか、という話をする。

たとえば盂蘭盆会の棚経（ことわっておくが私の寺では、これ全くの檀信徒の自宅仏壇あるいは盆棚への、年に一度の純粹奉仕である）から帰って、疲労困憊、堪えきれないような衣を脱ぎ、井戸端で行水をして、一日の汗を

流すとしよう。

行水に天の夕焼けした、れり 相馬遷子

素晴らしく美しい句である。

色彩、空間の拡がり、何よりも此処には、汚れなき健やかな人間の鮮やかな像がある。

ま、しかし、男の、それも坊さんの行水なんてもんはこんなに美しくはなく、ただただ荒々しい水垢離みたいなものだ。

とにかく水を浴びて、作務衣に着替えて、そして、そして、キューツとあの……あれを一杯……。

ところで寺方の隠語では、どうも酒のことを般若湯などと呼ぶらしいが、それでは麦酒のことは何と呼ぶのでしょうか。

「泡般若」

そう教えてくれた先輩がいた。呼び方なんかどうでもいいが、とにかくキーンと冷えた泡般若を飲む。

これが至福の瞬間となる。

このささやかな幸せを味わうことに対しても仏間は下るだろうか。あるいは、これは明らかに修行の妨げになるであろうか。(正)師よ、どうか教えて下さい。

それにしても、思えば、今年は酷暑の夏であった。

水虫の僧の米りて盆供養 田川飛旅子

世間の目というものは坊主には、なかなかきびしいものである。どう見ても秀句なのだが、こういった辛辣な視線はとも困ったものだ。でも、何だか面白い。もし当事者であってもクスツと笑ってしまうところがある。

ところで歳時記によると盂蘭盆も施餓鬼も秋の季語ということになっている。

陰暦を中心に考えるために、どうしてもそうなるが、あの汗と涙の激務をこなす棚経坊主(もし水虫ではなくても)から見れば、ど

うも馴染まない感覚である。

牛小屋と紙一重なり施餓鬼棚 加藤康人

この季節、句もどうしても暑苦しいものになる。こんな餓鬼棚でお経をあげたことはないが、何となく坊さんの鼻を曲げる表情が見えてくる。施餓鬼はやはり夏の季語に近い、と思える。

仏法によらずとも、この国ではどんな季節でも必ず終りが来ることになっていて、やがて盆を過ぎると、特に東北などでは秋風が立つ気配を実感する。

九月も半ばを過ぎれば、もう彼岸。漸く暦と体感が一致してくる。

ところで俳句では、彼岸といえは春彼岸を指すという決まりになっているようだ。

秋の彼岸のことは、あえて秋彼岸と言わなければならぬ、らしい。

御承知のように、彼岸とは春分、秋分を中

日とする一週間のことである。

俗に「暑さ寒さも彼岸まで」などというように、秋はこの頃から涼しくなっていくのだが、面白いことは、この二つのお中日が国民の祝日になっていることである。

戦前には皇霊祭(春秋二季)といって皇室の大祭の日であつたらしいが、それ自体は戦後、皇室の私事のひとつになった。

と、すると、春分、秋分といえは、確かに昼と夜の長さが同じという一種 地球物理学的な意味をもつだけの日になってしまったわけだ。その意味だけで祝日として残すことを制定したとすれば、何とまあ風流にして「微字間的」な国家ではある。

そこで、深夜、ひとりでジン・ロックを一杯やりながら六法全書を開いてみた。

「何で？」

と聞かないでほしい。

こら辺の酒好き酔っぱらいのこだわりが、どうも素直でないと思いが、性分な

ので仕方がないのである。

バラバラと目次を見ると、あるある。

「国民の祝日に関する法律」というのがある。
略称「祝日法」。

秋分の日項を見る。

「祖先をうやまい、なくなった人々をいつくしむ」

一読して、正直こりや驚いた。

なんと、なんと。

お彼岸に菩提寺に行ったり、お墓参りをすることは実は戦後、法律で決まったりしていたことなのだ！

ちなみに、春分の日規定は「自然をたたえ生物をいつくしむ」とある。

うーむ、美しいではないか。

歳時記では彼岸といえは「春」だが、六法全書では、彼岸といえは「秋」と主張しているようでもあって、何だか面白い。

もっとも、ここで調子に乗って「法律に書いてあるからお墓参りをしましょう」とか

「祖先を供養しましょう」とか寺方が言うのは、思いつ切り、筋違いだろう。

そんなことを言えば、うちの檀家などは特に贍曲が多いから、自主独立、あえて墓参に彼岸を避けるようになりかねない。

それは、全くの冗談だが、むしろ私が強く実感したのは、この国の、私たちの文化的環境というものは、これほど豊かで誇らしい伝統に培われているのだなあ、ということだ。

私たちは、どうやら自分で思っている以上に、素晴らしく明るい、おおらかな自然観や人生観のなかに生きているらしい。

秋彼岸にも忌日にも遅れしが 高浜虚子

名句。流石。大虚子。秀逸である。

確かに誰にも一霊ぐらいは、こんな仏の存在がある。私にも、こういう相手がいた。決して悪気があつてのことではない。いろいろなことが折悪しく重なって、何となく不義理

をしてしまふ。言訳のようだが、間の悪い組合せというものが人生にはあるものだ。

その方は、私の親友の一人のお父上であつた。生前ついに一度も面識をえなかつたが、目に見えないところで深くお世話になり、こ迷惑をおかけした方である。

あれは確か大晦日だった。くだんの友人が「これからオヤジの墓参りに行く。つきあつてくれないか」と電話をかけて来た。

年末で何かと忙しくはしていたが、寺の大掃除も昨日で終わつていて、男の仕事としては一段落していた（と自分では思っていた）ので、大方の家族の白い目をかいくぐり、思ひきつて出掛けた。

友人の菩提寺は臨済宗の寺であつた。

自分でも不思議に思うが、自らの法務としてではなく、そのうえ他宗寺院の墓地に立つと、奇妙に無防備な感じがする。

こういうのも職業病というのだろうか。友人はコンビニで適当に買ってきたらしい

鏡餅と蜜柑を墓前に供えていた。

「こうしておけばオヤジの正月も寂しくないよな」

友人は少し恥ずかしそうに笑った。

（こういう墓参りの仕方は困るな、いずれ浮浪者が鴉に狙われたりするし、いずれにしても墓所が汚れてしまふ）

などと、かなりディフェンシヴな感想を持ったが、友人の妙に真剣な表情を黙って見守るだけになった。

「一夜飾りはいけないとか言うが、お墓の前の飾りの場合もそうなるのか」

と訊かれ、もつと言葉に窮した。

返事の代わりに合掌し、小さな声で呟くように舍利禮文を称えた。

男一人、コートを着たまま、立つたまま。ついでない乱暴な回向だった。

この墓に眠っているのは、たった一人。見えないところで深く緑のある人であり、こちらが勇気を持ち、時を選ばなければ会っ

機会はあったのに、生前一度も会うことなく不帰の客となってしまった。

友人自身はそのことの深さを知らず、つまりは何とも思っていないかったのだが、むしろそのことも相まって、内心、忤怩たる思いがあった。このまま、ずっと墓前に坐つて一緒に元日を迎えられたら、きつと……いいだろうな。そんなことさえ思った。

正座して一夜墓前の鏡餅 墓鴉

これまさに拙句。

古今の名句に並べて出すのは恥ずかしい限りだが、そのときの偽りのない心情である。

この五七五はそのとき唐突に湧いた。

湧いたそのことすらも、ただ哀しくて悲しくて、突飛な発想だが、もう俺の人生はむしろかすると土いじりか俳句なのか、と直観したよさな気がする。なんだか一種、狭いところへ入り込んでの手びねり趣向。

こういった寂しい直観が、自分の人生にとって、衰弱なのか成熟なのかよく判明しないが、しかし、いま書いていて気づいたけど、衰弱と成熟はちよつと語呂が似ているね。

面壁もできず悟れず雪達磨 墓鴉

禅家にはど近くいたせいだろうか、不意にまた奇妙な一句が湧いた。

寺を出ると街はもうすっかり正月の用意を整えたのだろう。ひっそりと静かだった。

友人と歩くそこは東京の下町、谷中。

何処の家にも庭などという高級なものはないというわけで、玄関前にわんさかと植木を出している風である。

どれも狭い道である。車が通ると植木を引っ掛けそうで危ない。実際引っ掛けたりすると爺さんが飛び出してきて喧嘩になる。

そんな時に懐かしい江戸弁が聞ける。粋のいい呟呵が聞ける。

そんなことを思い、話しながら、久し振

りにふらふらと歩いた。

その植木みたいなものが、これはこれぢやんとした素性のものだということが、だんだん分かってくる。

おや、と思うような風情によく手入れしてあつて存外味わいがある。

佗助や素通りできぬ露地ばかり 暮鴉

鍋で一杯やりたくなつてきていた。

何鍋がいい、というわけでもない。近頃は何についても蘊蓄流行りで、鍋物みたいなものについても長口舌を垂れるような輩が続出して、どうも品のないこと夥しい。

私は目の前に湯氣を立てる鍋がありさへすればいい、という方である。

まるで愛想のないような湯豆腐でいい。

鍋のある風景を肴にして呑みたい。

見てるだけで心が温つたかくなつて気持ち

よく酔える。うまいんだな。これが。

ところで家で面白いが、外の店では鍋を一人で仕立てるのは気が引けるので誰かを誘うことになる。その誰かが鍋にあんまりうるさい人だと困る。

鍋奉行とか称して、差配しまくるようなのも困る。あまりに健康家でも困る。前者だと店さへなかなか決まらないし、後者だとアツという間に鍋の風景がなくなる。

と、いうわけで呼び出したその日の友人たちは、そんな私の注文にびつたりだった。静かすぎず、騒ぎすぎず。けれども鍋には、まづこと真剣に取り組んだ。

面白い連中であつた。

とにかく旨い酒であつた。

おそらく全員、相当に酩酊していたのだらう。数軒回つたところで一人に強烈な頭突きを貰つた。爽快さわまる頭突きだった。

鍋煮えて天下にわかに殺氣立つ 暮鴉

ただでさえ掲載されようもない手紙に、どうも埒もないことを書き繼いだものだ。

我ながら情けない。

ところで月刊「浄土」は奇妙に洗練されて良くなった。

隅々にプロの編集者の技が施されているのに、それでいてあざとい感じがなく好感が持てる。

抹香臭くなつたという評判もあるだろうが「浄土」の名称を持つ伝統の雑誌である。これでいい、と私などと思つ。

ところで私は長年の最も信頼してきた友人に裏切られつつある。要するに酒のことだ。

体調、どうも芳しからず。

などと気取つていても仕方がない。自分の方の問題なのである。要するに呑み過ぎなのである。断じて友人の責任ではない。

「浄土」編集部御中

合草

蓮門末席無頼庵暮鴉

立秋の頃

誌 上 投 句

おわすことさぐく盃月今宵

魂^{たま}まつるひとりの胸に灯を創り

施餓鬼会や役僧の子の大真面目

勤行の三代揃ふ夏休み

鬼やんま天地の間^{はざま}悠然と

シャベルカー唸り新たに夏を掘る

縦縞を着こなし西瓜並びをり

仰天の羅漢の石も夕焼ける

良響一慧 (埼玉県)

吉田ゆきゑ (東京都)

児玉良男 (静岡県)

児玉仁良 (埼玉県)

ひらかれた寺院をめざして 新井英一演奏会

藤木芳清

(東京教区城北組 貞源寺住職)

八月五日に新井英一という人の演奏会を行った。当寺の本堂は、三十六畳。その内ステージで十六畳を使ってしまうから、残り二十畳に対して定員を八十名とした。しかも、本堂にはクーラーが無い。扇風機も家庭用のが何台か有るのみ。時間も、ご近所とのかねあいもあって夕方の五時から。ほとんど我慢会のようなライブである。

いつ行ってもいいようなものに、わざわざ夏の真つ盛りに、空調設備もない本堂でなぜこのような演奏会を行おうと考えたのかといえば、

新井英一さんの曲に「清河(チョンハー)への道」という曲があり、その最後は、

「父の魂は海を越え山を走り、愛しい大地のふるさとへ。幼き日々に見た風景は歓喜と共に蘇り、待ちわびた人々の歌声に迎えられ、永久の眠りにつく。

父から父へ、母から母へ
アリラン」

こういうセリフで結ばれている。

これは先祖供養の歌ではないか、と思った。それ

ならば、お盆の期間にライブを行いたい。それも本堂を締め切って、閉じられた空間で行うのではなく、窓や出入口、向拝の正面も、全部を開け放して、開放された場所。そう考えた。

さらには、TBSの人気番組「筑紫哲也のニュース23」で四月から六月までエンディングテーマとして、この「清河（チョンハー）への道」が使われていたので、その記憶が薄れないうちに行いたいという理由もあった。

当日は、檀信徒の方々が半分強。在日と呼ばれる人達が十五人ほど。後は私の友人知人で、およそ百人ほどが集まり、本堂内に八十人ほどが入り、後は向拝に立っていたり、窓の外に集まったり、境内をぶらぶらしたり。それぞれが思い思いの聞き方で聞いている。その中を韓国から取材にきたTVのスタッフが動き回っている。

新井さんは、普段でさえよく汗をかく人で、この日は、ステージの合間に着替えをし、二ステージが終わり、私が話をしてしている間にシャワーを

浴びて、もう一度衣服を替えて挨拶に出てきていただいた程だった。

しかし、いつもながらの熱のこもった歌と演奏で、会場にいた人達はほとんど暑さが気にならなかったという。これは有難かった。

「大変だったでしょう」と、よくいわれるが、最後に話をしにステージに立ち、目の前にいる聴衆の方々の、心から満ちた表情に接したとき、私はすべてが報われたと思った。この表情を見たくて演奏会を行ったようなものだ。

当日、演奏会開始の二時間前、午後三時に新井さん達一行が寺に着いた。

新井さんの菩提寺は福岡に在り、確か浄土宗ではないと記憶していたので、私は、敢えて何も言わずにいたのだが、新井さんは本堂正面から入るとまっすぐに本尊の前に進み、正面に正座をする。目をむいてしばらくじっとしていた。やがて合掌すると深く礼拝をし、それから演奏会の準備が始まった。

私はこのときに、演奏会の成功を確信した。

たとえ参加者が少なかりうが、会場の条件が悪かりうが、そんなことは二次的な問題に過ぎない。このような心を持つ人が、父母、そして先祖からの流れを自らの内に見出し、後に続く者達に伝えていこうとする歌を唄う。

これに共感できない人に対して、私は、浄土宗の教えをもって布教化をする自信がない。



寺院、特に都会の寺院は、法要葬儀を始めとする仏教行事だけではなく、もっと寺そのものを、寺を護る者達を、身近なものと感じてもらえるような行事等を行うべきだと思う。

そこで私達の奥深いところにある過去から引き継いだ精神に気付くことができるならば、それが布教化の手がかりになると、私は信じている。浄土宗は、その精神を基にしているのだから。



V 読 O 者 I の C 声 E

●表紙や、ぎやうりいの写真、いつも心ひかれ
ます。内容も充実し、とても読みやすくなり
編集に当たる皆様のご精進の賜と、有難く存
じます。拙句ですが、誌面を汚ささせていただ
いております。どうぞよろしくお願い致しま
す。

(東京都 吉田ゆきあ)

■いつも「誌上投句」欄に作品のご
投稿有り難うございます。これから
も宜しく。

●目黒の隆崇院の檀家です。誌面一新、とて
も楽しくなりました。七月号では「法然上人
と私」がベスト。特集案の参考として、阿弥
陀如来をもっと詳しく教えて……。世界聖典刊
行協会刊 松本章男著「京都の阿弥陀如来」
がありますが五劫思惟や裸像、見返り阿弥陀

etc面白い(?)アミダサマを写真入りで
解説したら? 正直70才の私もはじめて「そ
んなアミダがあること」を知りました。これ
に加えて仏像の見方 or 浄土マングラの解説な
ど、全国各地の浄土宗寺院案内も面白いかも
御誌の参考に「曹洞禪グラフ」季刊がおすす
め。すでにご承知でしょうが……。読むより見
る時代ですね。老人はなおさら、暴言多謝。

(東京都 桐洞 輝)

■ご提案のこといずれも興味深くそ
のうち誌面に反映されることになる
と幸いです。

●こんにちは、初めまして。毎号とても楽しみ
に読ませて頂いております。興味深い内容に
感動しております。お墓参り、棚経、施餓鬼

会、灯篭流し。普段お墓参りをしたことのな
い人も、朝昼晩と集まる人々で玉泉寺の廻りは
社交場となります。そんな田舎に住み寺庭で
暮らす自分にお蔭様と手を合わせる日々です。
浄土の一層の充実をお祈りいたします。
こきげんよう。

(青森県 山内俊子)

■地域によってさまざまなお盆があ
ることをあらためて思います。素晴
らしい手紙、誠に有難うございまし
た。読みやすさのためのデザイン・
テクニクにも気を配っております。
例えば余白。文字写真イラストとそ
して真つ白な空間、本つてそれだけ
しか使えないんですね。
またお便りお待ちしております。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八
FAX〇七五―三一五―三七五三

〒六一五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評頂いております、皆様のためのコーナー

△J・FORUM▽。毎月、投句、投稿を頂いて

おりますが、編集部ではもともととたくさんの作品をお待ちしております。短歌や俳句、書評随

筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でどんどん応募下さい。この「浄土」をより楽しく、

すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・詩など…四百字詰め原稿用紙十枚以内

2 俳句・短歌・川柳など…二首まで

3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意

見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせく

ださい。…適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けてお

りますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。

また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーを

おとりの上お送り下さい。採用分については記念

品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るた

めに、皆様にアンケートをお願いしております。

1 九月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内
容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他、ご意見、ご感想など。

を、官製はがきまたはFAXで事務局までお送り

下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞ

ご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号を

お忘れなく）

●新規会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信

徒、お知り合いの方々にも本誌のご購読をお勧め下

さい。年会費は六千円です。また、ご寺院の皆様

方にはなるべく一般会員へのご入会をお願いさせ

て頂いております（年会費三万円）。一般会員の方

には本誌を毎号五部お送りしております。

また、お友達への贈りものにされてみてはいかがでしょうか。ご贈呈先のご住所、お名前をお知らせ下さい。あなたからのプレゼントであることをお伝えして発送させて頂きます。きつとあなたのあたたかいまごころを届けることができますでしょう。

●新規会員登録紹介（敬称略、順不同）

〈購読会員〉

*東京 目黒区 田北千代子

*東京 渋谷区 服部 淳

*神奈川 横浜市 古谷 節

*埼玉 幸手市 法蔵寺

●ビデオ取り次ぎ販売のお知らせ

本誌 六月号

△「FORUM」で

ご紹介致しました
ビデオ「わが家の
宗旨 浄土宗 日
常勤行」は大変ご



好評頂いておりますが、一般の販売店ではまだ取り扱っていないところが、少なくないようです。そこで、当会でもお取り次ぎをして、皆様の便宜をはかることとなりました。ぜひご利用下さいませようご案内致します。

●お詫びとお願い

実務上の都合により、送付・配本が多少遅れがちになり、誠に申し訳ございません。何卒ご了承の程お願い申し上げます。

また、本誌は万全を期して発送致しておりますが、万一不足、乱丁、落丁などがございましたらお手数ですが事務局までお知らせ下さい。早速、追加発送、お取り替えさせて頂きます。

↓アンケート、お問い合わせ、投稿は…

法然上人讃仰会

〒一〇五東京都港区芝公園四一七一四

明 照 会 館 内

TEL 〇三ー三三七八ー六九四七

FAX 〇三ー三三七八ー七〇三六



残暑お見舞い申し上げます。

今年の夏は冷夏であるなどという、長期予想があったのか、なかったのかはつきりしませんが、恨めしく思える今日この頃です。

猛暑が二年続くと、やはり地球温暖化は始まっているのだろうかなどと考えてしまいます。ジオカストロフィ（地球の破局）が声だかに叫ばれ、地球サミットがブラジルで行われたのは一九九二年、あれからまだ三年しか経っていないのに、地球環境論がマスコミで取り上げられることはめっきり少なくなった感があります。

この暑さ、暑い暑いと文句を言うばかりでなく、もうちょっと深刻に考えてみる努力も必要なのでしょう。

今月号から巻頭グラビアに武田泰淳氏の実のお兄さんで、東大の水産学の教授であつた大島泰雄さんが、晩年趣味で描かれた仏画を紹介します。絵にはまったくの門外漢であつた氏が、精魂をこめて一筆一筆描かれた魂の仏画とも言える作品に、定年後の人生の輝きを見る気が致しました。インド人が理想とした人生観に、人生を四期に分ける考え方があります。最初を『学生期』、いわゆる勉強をする時です。そして次を『家住期』仕事に精を出し、家庭を築く時です。そして『林住期』旅をして人生を考える時です。そして最後が『遊行期』、魂を解放し、自由な心境に入る時です。

私は、大島さんの作品にこの魂の解放を感じ、まよわずに『遊行期』の言葉を当てました。まさか人間万歳の作品であり、同年代の方々への応援歌となる作品です。十二月まで四回にわたる連載を考えております。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
齋藤晃道
栗田順一
村田洋一
太田正孝
石上俊教
佐山哲郎

編集協力

オフィス頼代代表 佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十一巻 九月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成七年八月二十五日
発行 平成七年九月一日

編集人

発行人

印刷所

写真植字

宮林昭彦
牧田諦亮
株式会社 平文社

株式会社 シーティーイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四丁目四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会
電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六

LIFE TOGETHER
NISSAN

人間のやさしさをクルマに。



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、
たのしい新実用主義。

○ いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ、それが、
○ こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、
○ しっかり仕事する、しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
○ 気持ちよくサポートします。

これ安心

■運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

● 限定、マルチリンクヒムススペンション(リヤ)、
● うれしい低燃費(1500X1(3速フロアシフト)
18.3km/l、1500REZZO(4速オートマ)19.3km/l、
● 1500X1(3速フロアシフト)19.8km/l、15-15セート燃費/
速報省燃費値)

らくちん

● 上質感のある、しなやかな乗りこころ。
● ゆったり室内スペース。

ツイてる

● 新型エアコン。
● トランク、ポケット等、収納性しゅうふん。

パルサー4ドアセダン
1500X1(3速フロアシフト)

131.3万円

パルサー4ドアセダン
1500X1(3速フロアシフト)

148.4万円

上記価格にはメーカーオプション(ナビゲーションシステム)12.0万円が別途必要となります。

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(国・北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

【Mr.しっかり】日常フダン活用、①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。
③～状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

● PHOTO / パルサー4ドアセダン1500X1、ボディカラーはブルーインシシシルバーパール(86G1)、スポーツパッケージは
メーカーオプション。● 希望小売価格はスベアタイヤ・標準工賃付、車検前仕様は1.7万円高となります。● 保険料、
税金(消費税含む)、登録等に付する諸費用は別途申し受けます。● 希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が
独自に決めておりますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。● 日産自動車お客様相談室 全国共通
フリーダイヤル ☎0120-315-232 ● お問い合わせは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産サテライト販売会社へ。



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。
ノドが、体が……。さて、黒ラベル。プシュッ！ゴクゴクゴクゴク……
「あーッ生きててよかったー！」と、声のでる。
このうまさは、何なんだ。ノドたく快感、
駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、
たまらない喜びに満ちている。
この黒ラベルの味、ひとことどうと？
「ノドうつ、うまさ」それが黒ラベルです。
ビールは、20歳になつてからあきかんはリサイクルへ

●協会の新しい自動販売機にも酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。



サッポロ(生)黒ラベル

サッポロビール株式会社

